

平成8年産「ゆめさんさ」の品質の特徴と品質向上対策

「ゆめさんさ」の品質向上のためには、栽植密度の確保と基肥中心の施肥等により適正範囲の籾数を確保し、乳白・心白の発生を防ぐ、未熟粒・被害粒の割合を減少させるために刈り取り適期を守る、1.9mm篩の使用を徹底することにより未熟粒を除去することが重要である。

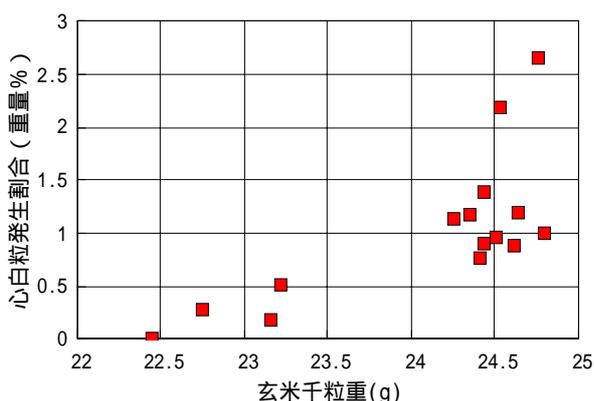
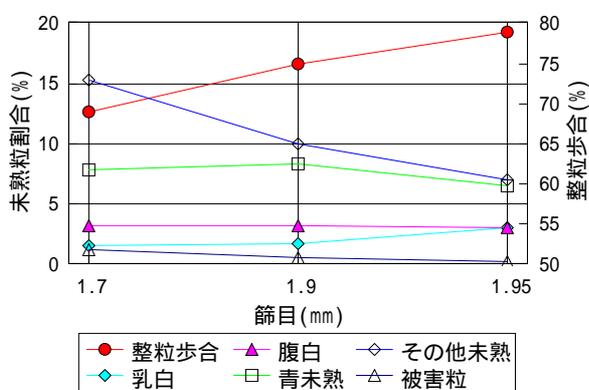


図1 玄米千粒重と心白粒発生割合 (H8 農試県南分場 篩目 1.9mm)

心白を増加させないためには生育診断基準の適正範囲内で穂数・籾数を確保する必要がある (m²穂数 510 ~ 550 本、籾数 30 ~ 33 千粒)。栽植密度 (20.0 株 / m²以上) を確保し、施肥は基肥中心とし (「あきたこまち」より N 1 kg/10a 程度の増)、追肥の重点時期は幼穂形成期とする (通常の生育では N 2 kg/10a) ことが大切である (平成6年度指導上の参考事項、水稻品種「ゆめさんさ」の栽培法)。



平成8年の場合は、粒厚の厚い未熟粒も発生した。そのため 1.7mm 篩では未熟粒の除去が不十分となり、整粒を確保できず落等する事例もみられた。1.9mm 篩の使用を徹底することにより未熟粒を除去する。

図2 篩目の違いによる品質の変化 (H8 農試県南分場、品質の判定は食糧事務所)

適切な施肥管理・栽植密度の確保・栽培管理

図3 「ゆめさんさ」の品質向上対策

